

昭和四十四年七月二十三日
 第三種郵便物認可
 第三行（毎月一回・十五日発行）

（通第二九〇号）

慈光

第二十五卷 第七号

次

無	無	無	無	無	無	無	無
慚	慚	慚	慚	慚	慚	慚	慚
録	録	録	録	録	録	録	録
近角常観	近角常観	近角常観	近角常観	近角常観	近角常観	近角常観	近角常観
……	……	……	……	……	……	……	……
佐伯猊下の追憶	佐伯猊下の追憶	佐伯猊下の追憶	佐伯猊下の追憶	佐伯猊下の追憶	佐伯猊下の追憶	佐伯猊下の追憶	佐伯猊下の追憶
……	……	……	……	……	……	……	……
福島政雄	福島政雄	福島政雄	福島政雄	福島政雄	福島政雄	福島政雄	福島政雄
……	……	……	……	……	……	……	……
師を求めめる心	師を求めめる心	師を求めめる心	師を求めめる心	師を求めめる心	師を求めめる心	師を求めめる心	師を求めめる心
……	……	……	……	……	……	……	……
信国 淳	信国 淳	信国 淳	信国 淳	信国 淳	信国 淳	信国 淳	信国 淳
……	……	……	……	……	……	……	……
一道会の記	一道会の記	一道会の記	一道会の記	一道会の記	一道会の記	一道会の記	一道会の記
……	……	……	……	……	……	……	……
榭原徳草	榭原徳草	榭原徳草	榭原徳草	榭原徳草	榭原徳草	榭原徳草	榭原徳草
……	……	……	……	……	……	……	……
念仏詩抄	念仏詩抄	念仏詩抄	念仏詩抄	念仏詩抄	念仏詩抄	念仏詩抄	念仏詩抄
……	……	……	……	……	……	……	……
木村無相	木村無相	木村無相	木村無相	木村無相	木村無相	木村無相	木村無相
……	……	……	……	……	……	……	……
宗教的朋友	宗教的朋友	宗教的朋友	宗教的朋友	宗教的朋友	宗教的朋友	宗教的朋友	宗教的朋友
……	……	……	……	……	……	……	……
花田正夫	花田正夫	花田正夫	花田正夫	花田正夫	花田正夫	花田正夫	花田正夫
……	……	……	……	……	……	……	……
(22)	(20)	(15)	(8)	(5)	(1)		

無 慚 録

近 角 常 觀

行きさきむこうばかり見て、足もとを見ねば、ふみかぶるべきなり。人の上ばかり見て、わが身の上をたしなまずば一大事たるべきよし仰せられ候（御一代聞書）

御慈悲じや〜と云うて御慈悲を持ちかえてわが身が人のために働けるように思っているのが、大間違いである。何時の間にやら仏のお慈悲をわが物顔に伝道じや、求道じやと知らず〜のあいだに標榜することの勿体なや。

聖人は小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもうまじとか、是非しらず邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなりと仰せられたは、実に胸に徹する御教化である。われらは実に名利のかたまりである。信仰を掲げて名利を売る、無慚無愧の極みである。

我等は愛欲のかたまりである。名利のかたまりである。剥げるべき名利は剥がさるべきが当然である。自分の心を考えて見ればあさましき心をいだている。外に賢善精進の相を現ずるを得ざれ、内に虚仮をいだけばなり。人をとがむることはない、われらの胸中は虚仮不実のかたまりである。貪瞋邪偽、奸詐百端（かんさひやくたん）にして悪性やめがたし、事蛇蝎に同じ、凡そ世の中にありとあらゆる事の源は、みな私心である。

実にこの頃は厭離穢土の感がしみじみ起る。そこに益々お慈悲のありがたみを知らして貰う。世があてにならぬところに、如来常住の光りを仰ぎ、厭離穢土なればこそ欣求浄土の心もおこるのである。

人世は手離しになつたときにお見捨てなきお慈悲ばかりがありがたい。

名利やら、身体やら、境遇やら、色々のものを杖として人生に立って居るときは御慈悲ばかりを喜ぶことが出来ぬすべての杖をとられたときに、唯南無阿弥陀仏一つばかりが杖である、力である。

人が臨終になった時は、実にこのすべての杖をとられて

慈悲に聖道浄土のかわりめあり、聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、思うが如くたすけとくることきわめてありがたしとか、今生にいかにか、いとおしふびんとおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし、と仰せられたは、いかにもありがたい、人間の力にては毛一本動かすことも出来ぬ。

十年二十年伝道して段々信仰がひろまるように思うているが間違いである。自分も漸々喜ばれるように思っているのが自分を買いかぶりて居るのである。

年を経るに随って自分の力のなきことや、喜ばれぬことが分るばかりである。眼前にあらわれて来る出来事は人のことではない。皆自分の心の有様をまのあたり見せて貰うのである。

独り生れ独り死に、独り去り独り来る、実に永劫の一人立ちである。このとき、

「汝一心正念にして、直ちに來れ、我能く汝を護らん」と呼びかけたまうが大悲の親様である。

この御慈悲一つが杖である、力である。わが身は地獄は一定すみかぞかし、生くるも死するもただ親様の思召しに打ちまかせるばかりである。如何なる鞭を加えらるるも甘受すべきである、如何なる地獄の炎に焼かるるもすこしも避くべき言、いまい、をを持たぬ。

入信の一念というは、この臨終を平生に取り越すことである、即ち大死一番することである。かくてこの御慈悲の綱ばかりで一人立ちをするのである。人間いよいよの場合御慈悲の力でこの坂をやすやすと越えさせしていただくのである。しかして信後の生活というは、畢竟からだは生きながらこの一人立ちの生活をするのである。

一人立ちになって居りながら、しかるに人間身体のあるんかぎりは、矢張り身体を当てにする、他人を当てにする、周囲を当てにする。煩惱もおこる、喜べぬようになる、息ぎ浄土へまいりたい心もない。実に凡情のしからしむると

ころ、煩惱のために狂わさるるところ、しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せ下さるとき、再び他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりと慚愧さしていただくのである。

ここに至りて他人を当てにすべきではない、周囲を当てにすべきではない、虚名を保たんとすべきではない、鞭笞（むち）を辞すべきではない、かくて向う様から救うて下さるが御慈悲である、護りて下さるが恵みである。

昔オウクツマという邪見の人が、人を千人殺して其指をもつて鬘（かみかざり）とせんとしたが、千人目に積尊に遇いたてまつりて、積尊の一偈頌の説法をききて、心すなわち開悟して遂に積尊の弟子となった。

その後、積尊に従つて舎衛国に入りて行乞せしに、小童が群集して或は石瓦をなげうち、或は箭矢を射、或は刀杖をもつて刺し撃ちたれども、彼は忍辱の行をなし、少しもこれを避くることをせず、かつて自分が犯した罪のことを思えばさらに苦とすべきでないと思ふべきでなく、少くも積尊は一人も殺さぬものとして許された。

我等が信仰上においてもまた同様の覚悟であらねばならぬ、あだかも罪人が断頭台にのぼりて死生を獄司の手にゆだねたるが如くである。聖人が仏天の御はからいにまかせ

不信不徳のために有縁の人々に大悲の親心を伝えることが出来ず、如来の子を罪業のために泣かしめるのは、上は仏祖に対して申訳けなく、下は如来の子をそこなうものである、無量劫アビ地獄に墮すべきである。

人が信仰に入りて喜んで下さるときは、さも自分の力であるかの如く感じて、人が信仰に入らずして業報に苦しむときは、自分の罪であることを懺悔せぬのが大間違ひじや、聖人は弟子一人も持たず、ひとえに弥陀の御もよおしにあずかつて念仏申す人を、わが弟子と申すことはきわめたる荒涼のことなりと仰せられた。そして積尊は、殺父の罪に苦しむ阿闍世王の罪を引受けて、汝罪あらば我等諸仏もまた罪あるべし、と仰せられた。罪という罪はみな私共の罪である。造るもつくらざるも罪体なり、思うも思わざるも妄念なり、今時の道俗たれか耳四郎に異ならんやと覚如上人は仰せられてある。観経の下品の機を不浄説法、無有慚愧と仰せられたは実に私自身のことである。

しかし何処々々までもお見捨てないのが無限大悲の親心にてまします、願にほこりてつくりん罪も宿業の催すゆえなり、さればよきことも、あしきことも業報にさしまかせ、ひとえに、本願をたのみまいらすればこそ他力にては

たまうべし、と仰せらるるも実にここである。かくてこそ転悪成善の益もあらわれて下さるのである。

オウクツマで思い出したが、歎異抄に唯円坊に対して聖人が、人を千人殺せ往生は一定すべしと仰せられたれば、唯円坊はこの身の器量では殺せませぬと申上げたとき、みよ人は自分の思うようには中々行えない。これというのも殺すべき業縁なきによって害せざるなり、わが心の善くて殺さぬにはあらず。また害せじと思ふとも百人千人を殺すこともあるべし、と教誡されたのは如何にも御もつともことである。誰しも罪を犯したいとか殺さんとか思うものはなけれども、知らず識らずの間にいかなる振舞を為すかも分らぬ、この点では他人の罪惡に対して責める口はもたぬ、なんとすれば、境遇を同じくし、因縁を同じくしたならば全く自分自身のことであるからである。

信仰上から云えば、他人のことは他人のことと思つてはならぬ、自分のことである。しかし他人であるが、自分であるが、かくの如き罪業のものを憐みたまう親心の徹したる一念は、あやまりはてて、過去、未来、現在の罪惡も消滅し、業報も感ぜぬようになるのである。実に我等は自他の別なく身を投げ出して懺悔をさしてもらう、自分の

候え。本願をたのむばかり、念仏をたのむばかり、御廻向をたのむばかりである。

和讃に、蛇蝎奸詐のころにて、自力修善はかなうまじ如来の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん。無慚無愧のこの身にて、まことのころはなけれども、弥陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまう。とある。しかれば念仏申すのみぞ末通りたる大慈悲心にて候べきなり南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

大正二年、求道十卷二号より

つれづれ草 (百四十三段)

人の終焉のありさまのいみじかりし事など、人のかたるを聞くに、ただ、閑かにしてみだれずといわば、心にくかるべきを、愚かなる人は、あやしきことなる相を語りつけ云いし言葉も、ふるまいも、おのれがこのむかたにほめなすこそ、其の人の日ごろの本意にもあらずやと覚ゆれ。

この大事は、権化の人も定むべからず、博学の士もはかるべからず。おのれたがう所なくば、人の見聞にはよるべからず。

お方とは別人であるかと思われるほどであった。猊下は実
に上は有頂（うちよう）から下は阿鼻（あび）地獄に至る
までを照したもうた法華経序品の積尊の面影を持ち給うた
のである。

そのお話とお声とは青年を感激させるものを持ってお
いでになった。猊下が御七十歳の頃、私は夏に法隆寺に籠
って維摩経のお講義を聴いたものであるが、そのお声は実
に永遠の青年の声ともいふべき趣があった。若々しい熱が
迸（ほどばし）って老年の御声とも思われぬという感じを
私は持ったものであった。

聖の道つらぬきませし梵行の

七十年の御声ひびくも



善財童子の発心の言

『私は長い間、三界の城郭に、高慢の垣を作り、愛欲の
深い濠をめぐらしております。愚痴の闇に覆われ、三毒
の炎をもち、悪魔の王につかえ愚かにもそこに住まっ
ていました。』

貪愛に縛られ、詭曲（てんごく）の心で正行（しよう
ぎよう）をやぶり、疑惑は智慧の輝きを障えて、諸の邪
道にさまよいました。

嫉（ねた）み慳（お）しむ心に縛られ、餓鬼の苦に陥
り、生老病死に支配せられて、愚かにも迷界に流転して
いました。

円満無上の慈悲と目の如き清浄の智慧とを具え給う文殊
大士は、克（よ）く煩惱の海を乾しつくし給う。願くは、
顧みて、こわしく私を觀察して下さい……。

法界のすべてを見透す智慧眼を具え、慈悲のみ心いと広
くして、諸の生類を安慰し給う文殊大士よ、何卒、私に
迷いの海を渡す最上の船を与えたまえ云々』

（福島先生意訳文）

師を求めぬる心 (三)

信 国 淳

△念仏には無義をもて義とす▽

問、念仏は人間の生活の中より生れたものであるといわれ
たのですが、それが私にははつきりわからないのですが、
どういうことでしょうか。

院長、人間の生活の中より生れたとは云わなかった。もつ
ともそう云えなくはないというところもありますが、とも
かく人間には、その生活のもっている問題性というものが
あるわけですね。その問題性に答えるものとして、それに
解決をもたらすものとして、念仏もまたおのずから如來の
本願を行す行として人間にかかわってくるわけでしょう
ね。

問、自分の中に問題があることから念仏がおこるのですか
院長、問題のあることが、問題自身の解決を求める。問題
が私達に解決を求めさせないではおかない。それに私たち
が求めるということには、実はすでに解決された世界があ
ってね、すでに解決したもの、解決しているものの世界

があつてね、それが逆に私たちをして解決を求めさせる。
だから私たちが解決を求めるのは、すでに解決したものが
あつて、それを求めさせるということになる。こういうか
かりあいのなかで私たちの上に初めて成就するのが念仏
なのです。

念仏は、文字からいえば私たちが仏を念ずるというこ
と。仏を念ずるといふ限り、これは私達が念ずることとし
よう。ところが私たちが仏を念じて、私たちの問題を解決
しようとするのがおこってくるのは、私たちをして念ぜ
しめる—私たちに念せしめて、その私たちの問題を解決さ
せずにはやまないという、仏とその世界とのかかわりあい
があつてね、そこで初めて私たちのことばとなつて出てく
るのが念仏である。だから念仏は一方的でない。たんに仏
をこちら側から思うという片思いでない。私が仏を念わず
におれないのは、仏が私をして念わしめる、仏が私を求め
るといふことがあつて初めて念うのです。そういう仏と私

との出会いこそが念仏なんです。「無量寿経」ではそれを「仏々相念」と云ってある。なにか自分たちの方から云えば念うこちら側から一方的に、仏にかかわっているだけのよう思う。しかしそれでは法にならないのです。念仏が永遠の法であるのは、私たちの念仏するのが、実にそのまま仏から、仏の本願をもって、念仏せしめられてする念仏だということにある。

我々に問題意識のおこる根源には、すでに問題を解決しているものがあるはずであって、そういうものがあって初めて私たちにも問題意識がおこるのである。もし解決しているものがないのなら、そもそも問題意識というもののそのものが、私たちにおこりようがないのである。

人間がなにか問題をもって苦しむと云う。人間は問題をもつ限り苦しまなければならぬのである。そして苦しむというそのことは、人間がなにかに逆らっているということがあつて起るのである、人間の生き方がどこかで間違っているということがあつて起る。だからつまり、どこかに間違わないものがあつて、そこで初めて間違うということが起り、苦しむということが起るのだということになる。

「歎異抄」に、念仏には無義をもて義とす。不可称・不可説・不可思議のゆえにと、おおせそうらいき、と第十章にあります。これは、人間がどこで間違うかという問題を

そしてそのように自己をもって正しとするその根底には、私のよく言う盲目的な人間の自己肯定がある。その盲目的な人間の自己肯定をひるがえしすしてしめるものこそが、実に不可称、不可説、不可思議の念仏なのです。

教行信証の行巻に「しかれば名を称するに能く衆生の一の無明を破し、能く衆生は一切の志願を満てたまう」とあるが、衆生一切の志願―だれでも皆自分が自分に帰りたいのだ。自分と一つになって自分に満ちたりてゆきたいんだ。又あらゆる人と手をつないで、あらゆる人と一つになつていきたいんだ。それが衆生のね、私も衆生の自ら知ることのない志願でもあるにかかわらず、人間は各自それぞれ独断的に自己を善しとして肯定している。その自己肯定の上に立って自分を正義化する、それが義でしょう。その義を破る。人間の唯一の依りどころである義をひるがえしすてさせる。そしてそこに、如来の義としまうところのものを成立させる。それが念仏というものでしょう。

△本願の心を頂く▽

問、私は本願を頂いて生活しておるのですが、本願と念仏の関係について、もう少し詳しく教えて頂きたいのです。院長、親鸞聖人の教えに導かれて、本願を頂かれるということになればですね。その本願を頂かれるころの他に念仏申す心というものは無い。本願を頂く心の自己表現とい

解明したおことばとして受けとれます。その義とは、人間が自ら正しとすることです。我に義ありとすることです。英語でいうとSelf-justificationということになる。人間が人間自身を正義化する、我に全ての正しきがあるとする。が実は、そういうことの全くないところに本當の正しきがあるのだ、といわれるのです。―「念仏には無義をもて義とす。不可称・不可説・不可思議のゆえに」不可称の称、不可説の説、不可思議の思議、―これは人間だけにあること。人間は自己を正しと称する、自分に義ありと称する、我こそ正しきを得ているんだと自らを称して誇る。自分を頼むわけだ。自己の義を称し、義を説き、又義を思議する。ところが、そういうことの全くないのが念仏だといわれるのです。

考えてみると、人間各自の義とするものが、実は人間同士の間を妨げている唯一のものであるようにです。第一に、私たちの自分自身と一つになることを、一刻々の自己に安定することを妨げておるものが義なんです。歎異抄の講義で私がいつも云っている善し悪しの分別思量、その善悪の分別思量が自分自身と一つになることを妨げる。自分と他人との間の自由な愛の交通を妨げている。義とは自己を正しとすることです。自己を正しとすることが、自己と自己自身、自己と他人との関係を塞ぐのです。

うかな、本願を頂く心が念仏申す心。念仏よりも本願の方々に心をひかれるといわれるようですが、それが私には分らない。本願は念仏せよという本願ですから。本願のお心が頂けるなら、頂く心がそのまま念仏申す心とならねばならない。本願を信受する心の他に、別に念仏があるのではありません。

本願を頂くとおっしゃっても、本願を解釈するのは頂くのではないのです。本願を自分の、人間の胸でこういうものだと、弥陀の本願とはこういうものだとか解釈するのは、本願を本願のままに頂くことではない。それは自分の解釈を自分が頂いているわけです。そこには大きな違いがあります。雲泥の相違があります。本願の心を念仏申す心として頂けば、念仏申すままに本願の心によって生かされる。解釈すれば、人間の心を立て、人間の心によって生きるだけですからそこでは念仏といっても、念仏が念仏になりません……。

いや誰でもそう、誰が仰言ってもそうなんです。本願の心を頂く心が南無阿彌陀仏で、本願を頂く心の他に念仏の心はないんだから。念仏せよというのが本願の心なんですから、そういう本願を頂く心が南無阿彌陀仏で、本願を頂く心の他に、南無阿彌陀仏という六字の名号がある筈はありません。名号の意味の詮索よりも、まず頂くということ

でしょう。本願の心をね。意味になる、ならんということ
を言っている時は人間の心がそこに入っているわけです。
本願の心を頂いておるんでないんです。人間の解釈する心
がそこにあるだけなんですわ。人間の本願を解釈する心、
これは人間の心なんですから、その人間の心が本願の心を
頂くことを、むしろ却って邪魔してるんでしよう。われ心
得たりしてるわけでしょう。本願の心を頂くということ
は、本願に直接することなんです。その間に人間の心が少
しも入らぬということなんです。

これは自分一人の見方だという事があるにはあるわけ
ですね。自分はこれで善い、これで正しいんだというもの
があなたにはあるんでしよう。だから又あなたは不安定な
んでしよう。そういう、質問なさらなきゃならんというこ
とは、なんか私なら私がね、それでよろしいんだと、その
通りなんだと、証明することを求めておられるわけでなん
でしょう。やっぱり正当化されたいんだ。私なら私によっ
て正当化された義があるあなたにあるわけです。これでいい
んだ、これでも正しいんだ、正しく頂いておるのだとする
ものがあるわけですわ。そうでしょう、だからその正しさを
誰かからやはり証明してもらいたい。その通りですよ、
あなた間違っていないよと、こう云って貰いたい気持があ
る。その心自身が実は本願を疑っている。違いますか。

とこういうような気がします。なに人間として、その人
柄で私の心を引く人を求める。友人間でもそうですけれど
も特に師というものへのかかりあいに於て、私は特にそ
ういうことになっていたと思うですね。

師を求めるということでしたが、最初出会った時に、あ
あこの人は、自分の求めていた人であったというふうに思
っていて、それがいろいろ一緒にやっていると、この
人もやっぱり駄目だなあという風に思うということ一つま
り、先生を見損うということがあつたらしいが、考えてみる
と私には、そういうことがなかったようです、初めて会っ
て、どこか心をひかれるけれども、この人はどうもほんま
ものではないのだというように感じる感じは、やはり最初
からあるんだね。可能的なものへの感とでもいっていいよ
うなものがあつて、それがもうその人と初めて会った時か
らちゃんとはたらくわけなんだなあ。むろん、付き合っ
てみて初めてその人がわかるということはあるけれども、そ
ういう場合も考えてみると、最初からもう一つその人に、
心から打込んでいなかっただか、融けこめなかつたとい
うことがあるのであつて、従つて最初の出会いが必ずしも決
定的ではないのだと云つてしまえぬものがあるように私に
は思えるのだがね。

問、この先生には、こういう面は尊敬するけれども、こう

——とにかく、まあなんでしようね。それで胸が、あなた
御自身のね、問題がすべて解決して、いわゆる後生の一大
事というものが解決して、あなた御自身の胸が晴れていら
っしゃるなら、もうそれで結構だと思つてます。それだけ
だろうと思つてますね。

△念 仏 の 人▽

私が池山先生に出会つたということは、弥陀の本願であ
る念仏を説かれる先生に出会つたこと、一つ法
に生きる人、自ら法に生きる人として私を教え導いて下さ
る先生に出会つたという意味をもつことなんです。

だけど、そういう先生に、一法に生きていられる先生に
いよいよ出会うということになるまでには、私の側、つま
り法を求めるこちら側に、法を求める心持がまだ熟してい
ないという場合がある。そういう場合は、法以外のところ
でなにか、だからつまり人間的にこちらの心を引き、こち
らを教え導いてくれるという、そういう先生を求めるとい
うことがあるわけでしょうね。

私の場合、最初から学問知識、あるいは技術を教えて
貰うという風な、そういう意味での先生を求めたというこ
とはないみたいです。最初からやっぱり人間的になにか出
来た人というか、出来たということとはつまり、尊敬もで
き、親しむこともできるといったような先生を求めていた

いう面は尊敬しないというふうな……。

院長、それはありますね。どんな人でも接近すれば、その
人はその人としてのいろんな弱さ、いろんな醜さをもつて
いるし、それは必ずあるはずです。

問、では池山先生に……。それは池山先生のすべてを尊敬
せられたわけですか。

院長、いやそうでないです。念仏の人としての池山先生を
尊敬した。念仏の人としての池山先生ということはね、池
山先生自身は人間としていろいろな弱さをもつておられた
そういう点では、私達とそう変りのある先生ではなかつた
と思います。にもかかわらず、その先生全体を通じて、そ
の先生全体をつつみ、全体を支えるものとして私に迫って
きたのが、念仏の人としての池山先生です。

まあ池山先生という方には子供がなん人もあつて、奥さ
んも早く亡くなられてね、私の知つた頃の池山先生という
のは、あとから来られた奥さん、若い奥さんでしたけれど
も、そういう子供にとればあとからきた義理の母です。そ
ういう義理の母を中心にして結ばれた先生の家庭というも
のは、必ずしも平和な、理想的な家庭生活ではなかつたの
かもしれませぬ。そこではきつといろいろな、複雑な問題
もあつたことでしょう。私にも先生の家庭に深く入ってゆ
くに従つて、我々世の常の人間の持つていろいろんな悩み

のあることが、だんだんわかってきたのです。

しかしそうした悩みの多い生活にもかかわらず先生が、その生活の全体を念仏の人として担ってゆかれたということですね。念仏の人として。与えられた生活の全体をいつわらず、ごまかさずに、そのまま受けとめていられた先生の姿、それに私は心をひかれたわけだ。そういう念仏の人としての池山先生は、我々と全く変りのない、むしろ我々以上に深いいろいろな複雑な生活内容をもっておられ、それだけに又一層深い悩みをもっていられたと思うのですが併しそれにもかかわらず、矢張り普通の人と違うんだわ。

だから私は、先きに云ったように一目惚れした。：一目惚れしたということは、私達の歓迎会に数十名の大学の先生達が偉い先生達がずらり並んでいられたわけだけれども、私の目には断然池山先生が光って見えた。他の人はもう問題にならないんだ。まあ乱暴なことを云うようだけれどつまり先生は大地に根をおろした巨木といった感じだ。不動心、不動の人、そんな感じ、第一印象がそれだった。と云って、私はその晩先生にものを云ったわけでない、ただ遠くの方から先生を、じっと見ておっただけ。だが、私があゝの歓迎会に出席した意義は、そういう池山先生との出会い―先生の「拳手」一投足に私が、思わず目を見はったというそのことによって尽くされるものであったと思う。

私がかさぎ云った、私も一つ念仏を称えてみましょうと云った気持ちになったというのも、矢張りその池山先生との出会いがあったからのことなんです。出会いといっても、先生と一緒に谷大に入って、歓迎会をしてもらった晩の出会いのことです。その出会いがあった後に、私が念仏をとって称えてみましょうという気持ちになったということそこにはやはり、先に云ったような私の気持ちがあったんだろうけれども、しかし又考えてみると、池山先生の冥加（めようが）というか、そういう先生の影響力がすでにそこにあっただとも思う。

ともあれそうして私は池山先生に出会う準備を始めたんだと思う。先生の門を叩くための一つの準備工作というものを、私は私なりに始めたということになっているように思うのです。

続く



つまり、それほどまでに私は師を必要としていたんだというのを、今にして思うわけなんだ。全く、これが私の求めていた人なんだなあということ、それが実感として迫ったなあ。しかもおかしなことに私は、その人の前に出るのが怖かった。

これは女の人から聞くことだけれど、例えば若い娘さんがね、たまたま誰か男に行き逢って、一目見てもうすっかり惚れちゃったというわけだ。するともう足がガタガタふるえ出して、側に行ってものが云えんというわけだ。好きな人を見つかった、そんなら直ぐ側へ近づいて、何かものを云ってみたいというようになりそうなのもあるけれども、逆に却って尻こみするというか、何かそういうことがあるらしい。

私の池山先生に対する場合にも、何かそれに似たことがあったかもしれない。何かその人の―池山先生の側へ寄れば私のあらが全部見透されそうで、それが恐ろしい。その人に近づきたいから、何とか自分の醜いところをつくらって奇麗になってからでないと近づけないんだと、こういった気持ちが逆に起るんだなあ。全くおかしなものですよ。その人に近づきたいが故に、なんとか自分を高めなければならぬと力む。つまり少しでも先生に近い人になって、先生と一対一でものが云ってみたいわけですね。

飯倉だより 島崎 藤村

誠 実

すべてのものは過ぎ去りつつある。その中であって多少なりとも『まこと』を残すものこそ、真に過ぎ去るものと言うべきである。

恥

弱いのが決して恥ではない。その弱さに徹し得ないのが恥である。

花のさかり

『君が園は花のさかりなり』とイギリスの詩人はそのソネットの一つに歌った。このところはもとより愛するものの生命に関してではあるが、私達はこの花のさかりをあらゆるものの生命に見たい。私達が住む狭い世界の何処かに今花のさかりだと言えようなものを欲しい。

老年

老年は私が達したいと思う理想境だ。今更私は若くならないなぞと望まない。どうかして、ほんとうに年をとりたいたいものだと思う。十人の九人までは、年をとらないで萎れてしまう。僅かな人だけが真の老年に達し得ると思う。

それからギリシャやロンドンを訪れ、アメリカに渡りました。其時丁度、全米仏教会の開教師の研修会をモントレールで開催中で、是非出席せよと招かれました。京大の東昇先生も来て居られて、パークレーの藤原凌雪師の御供をして三人でパネルディスカッションをせよということで、景色のよいモントレールへ参りました。

その時「米国における今後の仏教活動は如何にあるべきか」「キリスト教の社会活動の盛んな国で如何に匹敵する活動をすべきか」というテーマが挙げられました。

私は先きに話しましたローマでの経験を述べました。蓮如上人の「一宗の繁盛と申すのは人の多く集りて威の多くなる事ではない、一人でも信心を得ることが一宗の繁盛である」と御一代聞書を思い浮かべ、上人の偉大さを感じる思いが致しました。非常に衰微しておる真宗を復興するという現実的な問題に取り組みますには、技術的な政策面も必要でしょうが、しかしその根本に蓮如上人の仰言る宗教の本質というものを、浄土真宗のいのちの所在というものを、そしてそれに基づき一宗の繁盛というものをしっかりとらえて居らないといけないと思うのであります。

いくらキリスト教と競うて社会運動をおこして見ても、生命の所在のない活動がどれ程行われても、それは宗教の発展という、或い親鸞聖人の教の展開ということには成り

て非なるものは、どこかで消えてなくなるものであります。結局本当のものだけが残ってゆく、そういう感じが致しまして、今日は数年振りですが、一道会にあわせて頂き大変ありがとうございます。

あとがき

長時間にわたって、先生方の心に響き、身にしみる池山先生の追憶、お念仏の法雨に浴した満堂の法友達は、よるこびの色が顔に眼に輝くのであります。それから安らいと緊張からの解放のさわめきのうちを例年の通り精進料理の食事の準備が始められる。

その間、先生方を取り巻いて懐かしそうにお話を交わす人々、又帰途につく人々、静まりかえった空気に一陣の風が吹き込んだようでありました。

もっとお話をお願いしたい法友諸姉も沢山居られるのですが、帰路が暗くなるのを私は心配して食事に移ることにしたのであります。

食事の用意は毎月の静坐会の人々で進められて、台所からお座敷まで往来しきりである。漸く整って食事が始まりこれで池山先生の生誕百年記念、第三十五回の一道会、我々の「報恩講」のお斉(とき)が開かれました。

食後も彼方此方で法味のお話が交されたのであったが、木村無相さんから有難い過去の経験談を聴聞した。それは

得ないで、只しばらく形骸というものを作り出して行くだけのものに終る。

正に今、満たされなければならぬもの、それさえあれば如何なる問題にも答え得るもの、それを追求せねばならぬ課題であるにかかわらず、その肝腎なことがどこかえ忘られて、そして枝葉末節の言葉で如何に説くとか、或は如何に社会に食い込むとか、技術的な諸問題に走ることが私共現代人としての問題があるのでなからうか。そんな思いがいたしまして忌憚のない無礼な言葉を述べました。

今日、私共が学生の頃に接しました池山先生の面影をしのぶにつけても、宗教のいのちの所在というものの、間違いないその在り場所を、私共は先生によって知らされて参った思いがいたします。

そういう池山先生のいのちが、先程も申しましたようにこうして今日なお年々この一道会のお集りを通して生長しておいでになる、こういうことが矢張り聖人のお跡を慕う者の姿勢ではなからうか、という感じが深く致します次第であります。

そういう池山先生には数回の御縁であります。神戸に居ります頃に、甲南高校や芦屋の仏教会館にお講話された時に、先生のお念仏の息吹きにあわせて頂きました。私は色々なことを読んだり聞いたりしてきましたが、似

無相さんがかつて長崎の地で遭った「おしめ同行」の話で彼女は浜辺の漁村の同行で、常に波打際を歩いている時に波がヒタヒタと岸に打ち寄せては、歩いた足跡を消し去り穢い土を洗い去るのに餘念がない。この岸をひまなく洗って洗って息むことのない有様を

ヒタヒタと、ヒタヒタと

ああありがたい、ああありがたい

ナムアマダブツ ナムアマダブツ

とよるこばれる、という「ヒタヒタ同行」のおしめさんの有難いお話でありました。このおしめ同行は今もなお健在であることを後日のお便りで知りました。「ヒタヒタと、ああヒタヒタと、ナムアマダブツ」の姿を見るようで、このおしめ同行のことが今日の一道会の締め括りのようで、何とも云えぬありがたさでありました。無相さんの所へはその後もヒタヒタ同行の法味に浴した人々からお便りがしきりに来るとのことです。

一道会も終り、親しい法友達の二三は泊られ、長崎からの一団の人々は、新しい詰所が無相さんの近くに完成したとのことで、今年はそちらの方へ無相さんと共に帰られました。それから無相さんと引続いて法味の讃仰が続いたことでありましょう。

私は幸せである。三十一歳の秋から只今まで念仏の光触

を蒙って往生浄土の旅を続けさせていただけるとは。高く
かかげられる光輪に照し出されて、この業にあえぎ下ばっ
かり見て歎息する外ない愚痴の身が、好き人を与えられ、
沢山の善知識に護られて、慈光によって今まで知らなかつ
たおのれの愚悪さをすこしでも知らされ、おのれのおのれ
たるところを、光りを仰いで照し出されて、浄土への道を
南無阿弥陀仏と頂いて往く私の姿は、全部着せ換えられた
ただ念仏の着物一枚であります。この念仏の着物一枚さえ
あれば、良寛さんの語にあるように、年中、春に好し秋に
よし、夏も厳冬もすっかりこれ一つで片がつく。好き人の
仰せ一つ蒙ってたまわる念仏の一衣、ありがたい不可思議
のご廻向であります。

どうぞ来年の一道会にも遭えますようにと念じるばかり
であります、南無阿弥陀仏。

(終り)



孫と祖父問答

—お祖父(じい)ちゃんいくつ—
—お祖父ちゃんは七十五—
指折り数えていた孫が、びっくりした顔しながら
—僕の十五倍だね—
なぜそんなに長いこと生きているの?—
—なぜってまだ死なないからよ—
—そんならいつまで生きているの—
—そりゃわからんよね—
—お祖父ちゃんは死んだら、どこへいくの?—
もうつまった、返事ができぬ。
—先生、あわれなものです。五つの孫にきかれて、七十
五のわたしがつまってしまいました—
この老人の眼には、涙がにじんでいた。
—それで、あなたはどうか云いましたか—
—子供のくせに、そんなこと聞かんでもよいと言うてや
りました。—
もう老人は泣いている、ポロポロ涙が落ちた、底なき悲
痛の谷底である。一かどの立派な一生を送った、七十五
才の老人の腹一ぱいの結論であった。

橋本顯誠師著より

念 仏 詩

抄

木 村 無 相

たなの上で

ネギが

大根が

人参が

じぶんの出を

待つように

ならんでいる

こんなおろかな

わたしのために—

おなじにぎるなら

香山院龍温師仰せに

//コドモが

ドジョウをつかむに

これこそドジョウじゃと

つかむとドロじゃ

街路樹よ

街路樹よ

君は一生

立ちっぱなしだね

排気ガスやほこりに

まみれながら

それを今日まで

知らなかった僕

歩けることのしあわせを

はじめて知った

街路樹よ

君は一生

立ちっぱなしだね

自 炊

みなみなが
こんどこそとおさえたものは
邪見橋慢のドロジャ
なんべんにぎってみても
ウツばかり、

おなじにぎるなら
ナムアマミダブツさまを

大空は

わかるうわかるうと
してきたことは
はてなくひろく
ふかい大空を
つかもうつかもうと
してきたことだ

なんという
おろかなわたしか
大空は
ただあおぐばかり

一ト声 一ト声 一ト声

一ト声が
本願のお名のり

一ト声
一ト声が
本願のお呼び声

一ト声
一ト声
一ト声が
本願のおたすけ

ああ
夜がささやく

永遠をささやく
ああ
夜

ああ
夜が息づいている

一輪のバラに――

(四七・九・一〇日)

宗 教 的 朋 友

花 田 正 夫

日本は敗戦後はげしい社会変動によって制度も改革し、思想も一変し、価値観も違ってきて、かくて人と人との間の断絶と疎外の悲劇がいたるところにくりひろげられている。そこに世の識者たちから融和の道がいろいろと提唱されて断絶のみぞを埋めようといたましいまでに苦心し努力されているが、結局それは一種の接着剤的な効果はあるにしても、あわせものは離れものの域から出られない。

永続せぬ人間のみの友情

思うに対人関係で、自分が相手の態度の如何によっても変らぬ真心を持ち続けることができれば、どんな人とも和らぐこともでき、人生到るところに青山ありで、行くところみな可ならざるはなしといえよう。

しかし私どもの力には限りがあるし、また生まれつき好き嫌いの情もあって、ついには根負けして魂(たま)別れとなってしまふ。ここに私共の持ち合せの理解出来る智慧や、それに応じ得る愛情をたのみにした友情は持続しがた

い。たとえ永続してきたにしても、無常の嵐の前にはもろくも崩れ去って、おくれさき立つ悲しみの涙に終る。

こうした人生を仏はかねてよく見抜きたまうて、独り生れ独り死に、独り来り独り去る、とおっしゃって、よるべなき身の苦惱をあわれみ悲しまれている。

それでは、人生は孤独なんだ、行きつくところのない暗い砂漠の一人旅でどうにもなるもんじゃないとあきらめてしまえるかという、そうはいかない。否、むしろこうした人生であるからなおさらに、互いに相睦(むつ)び、相和したいとの願いはいよいよ切である。古来、士は己を知る人のために死すとか、知己を千載の下におく、などというのも、そういう知己を求めてやまぬ切なる声であらう。

ゲートルは「人はよくなりたいたいという願いを持つが、それは不滅であるが無力な願いである」といっている。あたかも翼を失った鳥が広々とした青空をあこがれながらいたずらに地上を走り廻っているのに等しい。藤村の詩に、

悲しきかなや人の身の
無き慰めをたずねわび
道なき森に分け入りて
など無き道を求むらん
とあるように、永遠に満たされることのない悲惨さである。

空しく消えた喜びや悲しみ

こうした人生に処して、私はいつの間にか七十になってひとり過ぎ去った歳月をかえりみると、沢山の人々と親しくもし、また因縁つきで別れもした。それぞれに親疎の情や、長短の時間の差はあっても、みんな離れるとうとうんじ、遠ざかると忘れ去る世の常の鉄則のもとに、喜びも悲しみも空しく消えて行った。

そうした中であって、ひとり仏縁に結ばれた同朋だけはこれといって格別に努力したわけでもないのに、世上のこの鉄則を越えて、顔かたちが銘々異なるように業報を別々にしたまふ、いつも変らぬ心の通いが、地下水が交流するように持続しているのに気づいて驚喜した。それかといってそうした友達も、互いに不完全な人間同士のこととして、愛憎の情も動き、意見の相違から争いもするけれども、幼い日、兄弟がたびたび喧嘩をしても、いつのほどにかそのしこりが共通する親心にかさされるように、仏の大慈大悲

ことが、何よりもその確かさをあかしてくださっている。

これと対照的に、聖人と同時代に鎌倉に幕府をひらき征夷大将軍として威勢は地を払った源頼朝公の墓前には、夏草が生い茂って旅人の涙をさそう夢が跡のはかなさ！人の世の空しさを知らされる。

聖人の仰せに、

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」

の信誓、実語は、たとえ雲霧がどんなに空を覆うても月そのものを消すことができぬように、まことなき世を何時までも照らしぬいて、ついにはまことの世界に転化させて下さる仏の真実心を徹見されたものである。

「何も残るものはない

何も残るものはない

ただ念仏だけがのこる

ただ念仏だけがのこる

えらいこつたよ

ありがたいこつたよ」

とは池山先生のこの世での最後の讃仰の声であり、またあらゆる言葉を失なわれるにつけただ念仏だけ申されつつ、その念仏のいきが絶えると共に浄土に還られたのであ

心におさめられて、世上の因縁を越えて、不完全な者同士がかわらぬ心の通いを恵まれていることは何とてありがたいことであろうか。これは私共が求めて得られた友でもなく、互いに努力してできた友情でもない。まつたく仏の無限の大智と無窮の大悲に支えられた朋友である。親鸞聖人が「御同朋、御同行」とかしずいて下さることもここにあり、単なる讃辞ではない。

夢のうちのちぎりーさどりのまへの縁

さらにこの親交は、互いに信者同士だけにとどまらず、いまだ機縁が熟さずに、現生（げんしよう）にその手を結ぶことはできなくても、必ずいつかは仏の願力に催されて睦みあうことができるので、その時節の到来に遅い速いはあっても、不可能ではない。老少善悪、賢愚貴賤のへだたなく一切善悪の衆生一人一人をわが一人子とみそなわして慈悲善巧のかぎりをそそいで下さる仏のましますかぎり、それは必ず可能である。

このこと的一端を事実の上で知らせて下さるのが、仏の本願の真実を顕わすという一事に九十年の生涯を貫かれた親鸞聖人が亡くなられて七百余年、恩顔は寂滅の煙と化し、徳声は無常の風にへだたるけれど、現在、何十万何百万の人々の心にあたたかみと光りと力とをあたえ続けて下さっており、いよいよその真実さがいやましに顕現している

った。

親子兄弟、夫婦、友人といってもみな夢のうちのかりのえにしであるが、この夢幻の世にあって、不滅の生きたまこと御縁を恵まれるとき、おのずと生き死にに障げられぬ浄土のさとりの旅に久遠の宗教的同朋があらわれてくださるのである。

（四八、六、一七日・中日新聞記載）

美 と は 高村 光太郎

美とは決してただきれいな、飾られたものに在るのではない。事物ありのままの中に美は存するのである。美は向うにあるのではなく、こちらにあるのである。芋虫は身ぶるいする程いやだという人達が、蚕はおこさまと言ってわが子のように愛しいつくしむ。それは莊子のように「利のあるところに愛あり」と解するのは誤りで、事物に深く親しみ、深く観察するところから自然とその美を感じるにいたる好例である。

戦場にある人々が、多く歌や俳句を好むようになるのは一切を洗い流した魂がおのずから深い美を万物に求めるからであろう。美を浅い、うわべなものと思わないようにしたい。

あとがき

先日ラジオの人生読本の時間に、人間国宝に選ばれている阪東三津五郎氏が「父がいつも、観衆の拍手を目標にした芸ではないかぬ、猿でも上手に芝居をする」と人々は拍手する。死んだ人の眼をおそれる芸でなければ本物でない、と戒めてくれました。現在そうした境地に達しているとも思いませんが、何時もそうした願いをもっていることが幸せと思います」と云って話を結んだ、池山先生がかつて「一芸に長じた人の語ることを為すことは是非ふれたいものだ、何か教えられるものだから」と云われたことも思い浮かべた。板画家の棟方志功氏も「自分が彫ったものはつまらぬ、自分は板の精とでも云うものの声のままに彫らずにいられない」と語っていたことも私の心に深く刻まれている。

さて、親鸞聖人生誕八百年の法要もほとんどこの春で終ったが、聖人の御目にどう映ったことであるうか、八百一年を踏み出すにあたり、聖人の御恩召しをさまたげないように、聖人の掲げて下さった不滅な法灯にまもられながら聖人と共に一人々々が信の旅をたどらせて頂きたいものである。信徒に一番大切なことは、聖人の眼をおそれ、聖人の声を聞くことで、そこから道は自然にひらける。

近角先生の無慚録は、仏智の照護の下に

「御慈悲一つで人生手放し」の極致を教えられます。ここに先生の生涯を貫ぬかれた根源を知らされ、わが歩みをきびしく省みさせて頂きました。

聖人が聖徳太子を讃仰せられたことは他に類例を見ないものがあるけれども、恐自身は仲々太子の徳風を身にうけることが出来なかつた。「祖師にきまて慕ひまつらんと聖太子たたのごとくにあまきのごとくに」と池山先生も詠じられて、近角先生、白井先生、福島先生方に導かれて牛歩遅々ながら御徳光を仰ぎはじめました。福島先生は法隆寺に参られて佐伯老師に直接手をとりられて太子精神を渴仰せられ、教育界に燈炬を掲げられました。二回にわたって太子のみ心に包まれた老師と先生の心の交流を誌して下さいました。

信国さんから本願にあらうことが師にあらうことであると詳しく語られたものを頂きました、繰り返して拝読いたしました。

榎原さんの一道会の記は、川畑さんと井上さんのお話で終りました。編集の都合で私が大要をかいつまんで書きました箇所がありますが御諒承下さい。

木村さんは念仏詩抄の出版後、応接やら書信で弱体を酷使されている模様、嬉しい悲鳴をあげておられます、御賢察のほどを。宗教的な友は、中日新聞の太田元徳さんのご依頼で原稿五枚に書きましたもので、御判読下さい。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半。一道会例会
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル。
○ 毎月二十四日、午前午後、昭和区小椋町、教西寺、法話会。
市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。

但し、八月は全部休ませて頂きます。病氣のためではありません、久々に夏休みをさせて頂きます。

定価 半年 四〇〇円(送共)
一年 八〇〇円(送共)

名古屋南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 吉野穂志郎

名古屋南区駈上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四四七

名古屋市南区駈上町二ノ八八

慈光社

電話六三二七〇三七番

おわび

七号の発送が印刷の都合で大変におく
れまして御心配おかけいたしました

又八月一杯は全部休講とさせて頂
きます 九月の涼風を待たせて頂き
ます 皆様の仰無事を此に申上げます

花田正夫